別紙様式３

平成３０年度　【　学園研究費助成金＜ Ｂ ＞　】研究成果報告書

学部名　文化情報学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　ミタ　タカアキ
氏　名　見田　隆鑑

研究期間　平成３０年度

研究課題名　椙山歴史文化館における体験型展示の導入とその展示効果の検証

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	見田隆鑑	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本研究は、椙山歴史文化館に現在展示されている資料の展示方法の見直しや改善を行うことを通して、学生の教育の場としての歴史文化館の展示効果にどれくらいの変化が現れるのかを研究するものである。椙山歴史文化館には学園の歴史を伝える貴重な歴史資料（原資料）が豊富に展示されており、それら一つ一つは学園のあゆみを示す貴重な資料である。しかし、これまで自身の学芸員課程の授業で行ってきた学生の評価を見ると、いくつか展示方法を改善することにより、その展示内容がより理解されやすくなる部分があるように思われた。本研究は、過去に収集した学生たちの展示評価も参照しながら何点か展示改善を試み、その取り組みがどのくらい実際の展示効果に変化をもたらすのかを実証的に研究するものである。

２．研究方法等（300 字程度で記述）

過去の展示評価の中で指摘の多い「体験できる展示資料を置く」点を本研究の課題とし、過去の展示評価で挙げられた事例および、今年度前期の博物館概論で得られる展示評価（120 名ほど）も検討し、具体的な方法を歴史文化館関係者とともに協議し、予算の中で可能な製作資料を選択し、製作をすすめる。実際に製作した資料を展示室に設置後、学生たちの利用状況、コメントなどにどのような変化が現れるのかを検証する。特にその展示物だけに意識が集まるのではなく、館全体の展示、体験の充実化が達成できているかどうかをポイントとして見ていきたい。今年度の研究では、学生からの希望が多かった椙山女学園の歴代の制服のうち、明治期に着用された裾に黒いラインが入った袴、大正 15 年に制定された制服を体験型の衣装として製作し、歴史文化館の展示資料として加える他、椙山正弌先生の等身大パネルの設置、手に取って中身を読める『糸菊』（実物）の設置などを試み、その活用の様子や展示効果を観察する。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

本研究の中で体験型の資料を実際に制作した。まず１点は大正期の制服である。現在、椙山歴史文化館には過去に生活科学部で制作された大正期の制服が展示されている。この制服は実物資料が存在せず、過去の写真資料等を参考に制作されたものである。本研究では、大正１５年に制定された制服を来館者が実際に身につけることが可能な体験型の制服を２着制作した。制作にあたっては、研究代表者が原案を考えた上で、大塚屋のオーダーメイドを担当しているスタッフのもとを訪ね、原案に近い形で実際に制作することが可能かどうかを相談した。その後、プロトタイプが完成し、修正が必要な箇所や実際の布地の素材や色味などを検討した上で本制作に入ってもらった。制作途中では博物館資料論の授業の中で学生からも意見をもらい、制服とともに姿見なども合わせて歴史文化館に納品した。大正１５年に関係する当時の古書も合わせて納品した。２点目は、明治期の制服（袴）の体験用資料の制作である。袴は１から制作するのは費用的にも難しいことから、袴そのものはアンティーク着物を取り扱っている店舗で２着分購入し、椙山独自のデザインである袴の裾のギザギザの黒いラインのみを博物館資料論の授業の中で学生とともに作っていく形を取った。また、その際に実際に着用するに当たり必要な改良点について学生から意見を聴取し、実際の体験の際に生かすこととした。３点目は、椙山正弓先生の等身大パネルの作成である。これは従来、正弓記念室の場所がわかりにくいという意見が学生からあったことから、場所を示すサインとともに、等身大で制作することにより具体的な人物のイメージを学生にも持ってもらうことを期待し制作した。４点目は、天井に映写することが可能な小型のプロジェクターを歴史文化館に導入し、学園に関わる過去の写真をスライドショーで映写できるようにした。５点目は、触れる「糸菊」や学園史料を展示室内に設置した。これらは古書店より購入したもので、ケース内で展示する保存用資料ではなく、活用型の資料として手に取ることができるようにした。

４．キーワード（本研究のキーワードを１以上８以内で記載）

①椙山歴史文化館	②展示改善	③展示効果	④体験型展示
⑤自校史教育	⑥制服	⑦触れる展示	⑧博物館学

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

本研究に関する研究成果は、次年度の「博物館概論」の授業内で行う学生の展示評価を踏まえて文化情報学部の研究紀要にまとめる予定である。その際には、平成２９年度に制作した金剛鐘に関する展示資料の評価も合わせて検討したいと考えている。
論文以外の実物での成果物について、椙山歴史文化館に納品した成果物は、先の「3.研究成果の概要」に示した通りである。